

2020年6月26日

経済産業省金属課 御中

全国鉄鋼販売業連合会

2020年6月経済産業省金属課ヒヤリング資料

(全鉄連・阪上会長)

【2020年1月～6月の需要動向】

(製造業界) 昨夏より海外景況悪化により輸出産業を中心に生産減少傾向強まる。また、昨秋の水害による一部部品供給停滞により、建機、農機、工作機械業界などで、生産縮小が加速した。3月には一部業界において、コロナ問題により中国よりの部品入荷遅れによる、生産減少も発生。さらに4月以降は国内コロナ問題による、輸出、内需減に加えて操業休止措置も発生、鉄鋼内需は鋼板類、特殊鋼類を中心に急減に見舞われた。

(建設業界) 公共土木については、底堅く推移しているものの、建築は一昨年でピークアウト。昨年前半より前年比1割程度の縮小状況が継続。FAB業界も大手でも超繁忙からやや繁忙程度に落ち着いている。一方、ハイテン・ボルト問題は略解消しており、ボルトメーカーの生産も縮小となっている。

(流通業界) 条鋼・建材商品の販売実績は、前年比1割程度の減少が続いているが、薄板、特殊鋼類は年初より販売減少幅の拡大が加速4～5月は前年比3～4割減程度まで落ちている。鋼材価格は昨年夏以降値下がりが続いており、特に3月以降、値下がり角度がきつくなった。その結果、全鉄連の業況アンケートの収益状況をみても5月度の月次赤字企業比率は74%まで悪化している。ユーザー業界、流通業界とも原材料、仕掛品の在庫調整を進めており結果、メーカーの受注量は条鋼・建材メーカーで2割程度、特殊鋼メーカーは軒並み半減以下まで落ち込んでいる様子。

【2020年7～9月需要見通し】

(製造業界) 造船以外は4～6月期で底打ち回復基調を見込む。業種、業界により差はあるが、一般的に7～9期に関してはスローペースと想定されV字回復は期待できない。

(建築業界) 大型案件は、現状中止・延期などの動きは少ないものの、前年を下回るレベルでの受注状況。一方、中・小口物件では、工場、店舗等で中止が散見され、特に小型ホテル案件は中止が相次ぎ壊滅状況に陥っている。新規案件でも見送り等も起こっており低調推移が続く、FABの受注価格も値下がりしてきており、また一部内定物件でもGCより価格見直し打診の話も散見される。結果、本来なら需要期に入る7～9月以降は前年比減少幅の拡大懸念が高い。年度トータルでは前年比で2～3割減少との見方も一部にみられる。

【その他】

①鉄鋼業界の事務処理負担軽減策として、下記運動へのご支援のお願い

*ミルシート様式統一化

ミルシート要求先、件数の増加に伴い管理・発行手間が膨大になっております。さらなる機械化による事務合理化を進めるうえでメーカー各社の現品添付の絵付、ラベル及びミルシート記載書式の不統一が大きなハードルとなっております。

*商品名等の用語の統一化

現状規格名などは、JIS等で標準化されておりますが、商品名やサイズ表記などにおいては、各企業によりバラバラな略称が使われており、例えば請求書と社内検収書類との自動照合など種々の伝票処理において、機械化を進めるうえで大きな障害となります。今後業界全体として、事務合理化を進めるためには、業界として表記用語等の標準化を促進する必要があります。

②今年も、全鉄連として政策要望を後日になりますが、提出させていただきますので、宜しくご配慮のほどお願いいたします。

(東京・齊藤副会長)

これから鉄鋼流通加工はジワジワと景気後退が表面化してくる。設備投資も建築、土木も新型コロナ前の需要に戻るには 少々時間がかかると思われる。今年は回復しても昨年末比70%位であろう。流通稼働も70%位と考えられ、夏前からボディブローが効いてくるだろう。秋需で回復した後もしばらくの間は70~80%の回復で推移すると思われる。

(東京・井上常任理事)

6月に入り、荷動きが一段と悪化。業種別の稼働状況をみると自動車関連は大幅減産で落ち込みが大きい。次いで、建産機も大幅減産。建設は他業種に比べると落ち込みが大きい。コロナの影響で工事に遅れが出ている。テレワーク対応のため、パソコンや巣籠需要の増加で製缶は好調。在庫が増加している。需要減少の中、メーカーの出荷ペースが速く、在庫の増加が止まらない。輸入材も多く、安売りが散見される。サプライチェーンの見直しは必至。中国一極集中から分散するのか、国内回帰するのか、各社対応は様々で注視が必要。急激に業績が悪化している企業も多く「倒産」「廃業」等の発生が不安視される。

(東京・山岸常任理事)

【東鉄連5品種部会より報告】

(薄板部会) 4月末の薄板3品在庫は435万1千トン。メーカー在庫が192万1千トンで前月比▲7万5千トン。問屋在庫は前月比+3万4千トンで95万トン。コイルセンター在庫は+1千トンで148万トンでした。高炉は製鉄所を一時休止しているところもあるが、なかなか問屋もコイルセンターも在庫が減少してこないのが現状。鉄鉱石は1~3月、4~6月、7~9月と100ドル超えまで上昇している。原料炭は1~3月147ドル、4~6月135ドル、7~9月115ドル。足元110ドル位まで値下がりしている。中国発の新型コロナウイルスの影響で日本国内はこのような状況だが、中国の経済活動は相当活発になってきている。鉄鋼需要も相当増え、5月粗鋼生産が9千万トンを超えた。ホットコイルもアジア市況が400ドル位だったものが50ドル位値戻ししており、先高観はうかがえるが、国内の薄板需要は正常ではなく、通常のレベルに戻るまではまだまだ時間を要する。特に5月は稼働日数減の影響もあるが、リーマンショック以上に落ち込んでおり、大変悪い状況。6月に入っても需要の回復は進んでいない。輸入材(POSCO、CSC材)の安い材料は第1四半期、いまだ入着していない。安い輸入材が入着することを考えると市況の上昇はまだ先と考えている。原料高のため国内高炉メーカーは現状より価格を下げることはないが、店売り価格と輸入材の価格差は乖離したままである。足元の需要から考えると435万トンの薄板三品在庫は依然として高水準であると言える。

(厚板部会) 東鉄連厚板部会在庫販売調査によると5月販売量は前月比で20%以上の減少、前年同月比では30%以上と大幅減少している。これは新型コロナの影響だと思われる。5月在庫量は前月比約5%減少。市況は新型コロナの影響がなかった2月より月を追うごとに弱含んでおり厳しい状況である。全向け先で悪く、リーマンショック時よりも悪い状況である。建産機は低水準、回復してくるのは9月以降になるのではないかと。自動車も低水準。トラック、ダンプ、架装なども停滞状態で、昨年並みの生産に戻る時期は未定である。素材販売は大幅減、店売りにかかわらず、荷動きはすべて低調。5月は数十年経験したことのない低水準の商いであった。メーカー動向の詳細はつかみづらいが、高炉メーカーは弱気な状態になっており、タイトな状況ではない。市中在庫も潤沢で全品種とも市況は下落傾向で信じがたい安値も散見される。ユーザーが新型コロナ対策で生産調整をしているため予定している生産を下回っている。今後の仕事量は新型コロナの終息にすべてかかっている。新型コロナが終息すれば秋以降、例年並みに戻ってくるという予想もある。新型コロナの影響によりインバウンド事業および輸送宿泊観光部門の需要がないため、それにかかわる建築や運送に必要な車の需要が減少するのではないかと懸念している。

(鋼管部会) 需要について、自動車が悪い状態。自動車関連部品は5月、6月と毎週金曜日は休みになっており、パイプの部品は5日稼働が4日稼働になり、少なくとも2割以上減少。1日の稼働が9割以下の稼働もあり、恐らく4～5割減少している企業もある。トラック関連、架装、エンジン関連も通常の7～8割位ではないか。建設機械は前から悪い状態で低調が続いている。建築、土木も低調。プラント、電力関係、公共事業関連は悪い中でも結構いい数字かと思われる。鋼管の在庫は、どの品種も通常ほぼ均衡状態を保っていたが、ここにへて少し過剰感が出てきている。特に材料管は機械向けに使用されるため過剰みである。高炉メーカー、溶協メーカーとも価格は維持しているため、我々の市況も大きな落ち込みなく維持できている。5月は相当悪かった。それに比べると6月はまだましな方だと言える。

(棒鋼部会) 5月、6月はメーカー姿勢が強硬で相場は横ばい。荷動きは前年比で、4月は30%減、5月は40%減、6月に入り15%減位の悪さである。6月の稼働日は、22日あり荷動きが戻ってきている感がある。3ヶ月後の景況はやや好転すると予想している。商いが小さくなっているため、大事に商売していく。漸進的に仕入を抑え、今年の夏までには適正在庫にしていきたい。

(形鋼部会) 東鉄連形鋼部会の調査によると5月販売総量は、前月比20.3%減。前年同月比23.3%減であった。品種ごとにみていくとH形鋼は前月比約20%減、一般形鋼は約27%減、コラムは16%増加した。全国ときわ会在庫によるとH形鋼の5月在庫量は17万7千800トン。前月比3万6千トン減と2ヶ月連続で減少。6ヶ月ぶりに17万トン台となりました。

(需要面) 4月の建築着工統計は全建築36万3千トン。前月比0.6%減、前年比3.9%減、小規模S造は0.6%減となっている。大手ファブ物件のズレ等への対応から山積みも7～8割に留めながらも年内までの稼働財源は確保している。中堅以下のファブは山積みの薄い状況が継続している。中小案件では景気悪化による案件の中止や延期が一部で見受けられるも、緊急事態宣言解除後の経済活動再開に加え、季節的要因からの需要回復も見込まれる。現状、流通では、店売り物件、引合いも少ない。小口案件についても指値が厳しく折り合いをつけて販売することが多くなった。建築需要の落ち込みが大きい。

(供給面) 高炉メーカー、電炉メーカーもロールには余裕がある。ここ最近のスクラップ値上げで安値から7千円以上上げてきている。本日、東京製鉄が7月売出し価格、形鋼5千円アップ、鋼板3千円アップとなった。他メーカーも追随すると思われる。4月よりメーカーは契約、物件も少なく、生産調整している状態だが、今後需要が回復するかが注目される。

(今後の課題) 新型コロナの影響と2020年オリンピックの延期で国内建築需要のピークは読めない状況だが、メーカー値上げもあり、下期から徐々に高い水準が見込まれる。流通は足元をしっかりと固め慎重な仕入れをして次の展開に向け適正マージンを確保するため早々に市場改善への取り組みを進めていきたい。

(東北・川勝常任理事)

- ① 土木、建築ともに多少あるが、建築は先行き不安視される。
- ② スクラップは値上げだが、物件数字の減少で市況は横ばいと思われる。
- ③ 需要、市況とも不透明。
- ④ 会員数が減少している。

(富山・武部常任理事)

緊急事態宣言解除から中型物件が一斉に再スタートし、あわただしくなり始めたのに対し、新規案件はなく、秋口から年末に向け減少傾向は続きそうである。5月から受注減により再見積り等が増え、低価格化もちらほら散見される。材料価格も下げ切り、利益圧縮の後半となりそうである。福井地区は新幹線周辺工事が順調で安定していると聞いている。